

木原孝一著

民族の詩学

詩の原点と展開

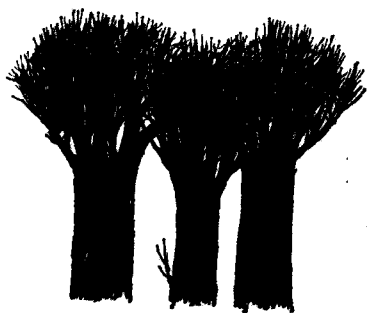


飯塚書店

木原孝一著

民族の詩学

詩の原点と展開



飯塚書店

著者 木原孝一 1922年東京生。墨田工業高校卒。
「VOU」「荒地」同人。『詩学』『現代詩手帖』編集。
東京総合写真専門学校講師，他。
詩集『星の肖像』『木原孝一詩集』『ある時ある場所』他。
編著『100人の詩人』『日本愛唱詩集』『人間の詩学』他。
放送詩劇『一番高い場所』その他により芸術祭文部大臣賞，
奨励賞。イタリア賞グランプリ受賞。
日本現代詩人会会員。

民族の詩学 詩の原点と展開

1975年 5月20日発行

著 者 木 原 孝 一
発 行 者 飯 塚 広
印 刷 所 赤城印刷株式会社

東京都豊島区駒込 6～6～23 飯 塚 書 店
TEL (918) 2 0 9 0 振替東京 3-13014

1392-13002-0300

読者への手紙

たとえば優れた美術評論家が、あらゆる角度から分析し、あらゆる方向から光りを照射して、一枚の絵画Ⅱタブロウの意味を説きあかし、その秘密を探求し、その価値をしぼりだすというような作業が、一篇の詩篇について成し得ないものだろうか。日本の詩篇のうち、真に名作と呼ぶにふさわしい作品について、そうした視点からアタックしてみたい、というのが、私のながいあいだの念願であった。ところがいざその作業を進めてみると、前冊『人間の詩学』だけでは、その準備運動がまだ充分ではないということがわかった。画家ポール・ゴーガンがタヒチ島で描いたタブロウのなかに、『われわれは何処からきたのか？ われわれは何処にいるのか？ われわれは何処へゆくのか？』と題された傑作があるが、われわれの詩についていえば、われわれの詩は「何処からきたのか？」さえも、われわれは正確には知っていない。われわれⅡ民族の詩の原点が何処か、よくわかっていないのである。なによりもさきに私はその問題、日本の詩の原点をまさぐる作業からはじ

めなければならないと思った。そのうえに立つて、この『民族の詩学』で私の意図したことはつぎのことである。民族の詩の原点を探ぐることは同時に民族の魂の歴史を遡航することにはかならない。ある一面から見れば、それは日本人の精神史、また、日本人の美意識の歴史を書くことと同じである。そして気の遠くなるほど長く、また煩雑な歴史のなかで、その煩雑さに埋没されつくさないためにも、その時代の状況の眼と、現在における人間の眼と、状況を超えた永遠の眼と、この三つの視線のフォーカスを合せた詩人の眼を失わないように努めた。

さて『民族の詩学』を書くことによって、私はようやく、いまでも日本の詩としての伝統を失わない俳句と短歌と、そして明治以降の近代詩、二十世紀の現代詩について語るべき時点に立った。続けてライフ・ワークとしてのこの仕事を果してゆきたい。読書とは著者と読者との共同作業による遺産の構築にはかならない。本書を開いてくれた読者諸君に感謝する。

一九七五年五月一五日

木原孝一

民族の詩学

詩の原点と展開

目次

読者への手紙

- 1 詩のはじまり 日本の詩の原像 7
- 2 呪詞としての詩 17
- 3 祝詞としての詩 29
- 4 御言持ちの詩人 41
- 5 鎮魂の詩人 レクイエムの原像 53
- 6 歌垣の詩人 愛の詩の原像 65
- 7 自然のなかの詩人 叙景詩の原像 75
- 8 詩と真実 歴史と詩 89
- 9 人間のアンソロジー『万葉集』の世界

10	内面の声	悲劇の発見	119
11	詩の第二の声	柿本人麻呂	129
12	詩と批評の発見		143
13	悲劇のロマンチズム		157
14	仏教の詩精神		177
15	無頼の魂		203
16	女の魂	仮名の魂	215
17	『私』の発見	抒情詩の完成	229
18	地獄変相		247
19	人間群像の歌声		265
20	『平家物語』	叙事詩の完成	279
21	幽玄の美学	詩と劇の一致	291

1 詩のはじまり 日本 の詩 の原像

むかしは鳥も通わぬといわれた八丈島から、御蔵島、三宅島、大島と、伊豆諸島を真北にたどつてくると、東京湾の入口で三浦半島に突きあたる。その突端は北原白秋の詩で有名な城ヶ島だが、そこから半長靴のかたちをした半島を左沿いに廻つて東京湾に直面した観音崎を過ぎ、横須賀の海港を過ぎると、鷹取山の裾にちいさな入江が二つならんでいる。手前が長浦漁港でその隣りが平潟湾である。いまは平潟湾も埋め立てられてコンクリートの岸壁が続き、近代的なダムの岸辺に似た風景になつてしまつたが、私が生まれた頃、いまから五十年ほど前までは『平潟の落雁』といつて、金沢八景のひとつに数えられていた。

金沢八景というのは、ほかの七つ、鎌倉幕府の執権北条氏の持仏堂であつた称名寺の晩鐘、内川の暮雪、乙鱸の帰帆、野島の夕照、洲崎の晴嵐、小泉の夜雨、瀬戸の秋月とならんで、江戸初期にここを訪れた明の心越禪師しんこくぜんしがその美景に感嘆して名付けたものだといふが、なるほど、私が幼年の頃には東京湾の空を群れをつくつて飛ぶ雁の姿がよく見られたものだ。

この金沢八景から南へ丘陵を登り、朝日奈切通しの坂を越えるとすぐ鎌倉に続いていて、この付近には、北条義時の開いた「金沢文庫」をはじめ鎌倉時代の旧跡が多いが、実は更に古い縄文期の遺跡も数多く見られるのである。いまは埋め立てられて陸続きの野島町、夏島町になってしまったが、以前はこの平潟湾のなかに、野島、夏島という二つのちいさな島があった。

戦後、日本の古代史に対するタブーが解かれ、この夏島にある貝塚の発掘が進むと、驚いたことには、その最も下部の貝層のなから縄文文化初期の尖底土器が出てきた。これは全面に縄文のあるコップのような土器だったが、同じ貝層の木炭片と牡蠣殻について放射性炭素による年代測定を行った結果、いまから九千年以前という年代があらわれた。このちいさな粘土のコップは実に九千年以前に、この夏島に住んでいた人間が使っていたものである。更に掘ってゆくと同じ貝層のなから、刃をつけて磨いたナイフのような石器と、釣針や銚のさきに使ったと思われる骨器が出てきた。いまのところ、はじめての本格的な土器は紀元前六千五百年頃、西南アジアにおいて製作されたといわれているから、考えてみると、この夏島土器は世界最古の土器ということになる。

いまから九千年前の夏島。そこからは烈しく燃えさかる富士山が空の高みに見え、火を噴く愛鷹山、箱根山がその下に眺められた。その裾野にひろがる原生林のなかには、鹿と猪が彷徨し、時には大陸からの陸橋を渡ってきたブスキンド象が歩いていた。その頃の東京湾はほとんど現在のかたちと変らないだろうが、暖流が流れこんでいたので、海はいまよりも暖かく、生きた珊瑚礁がその底にあった。貝類や魚類は、おそらく現在の沖縄近海のように豊富であったと考えられる。

私はいま、臉のうらにひとつのイメージを描く。九千年前のある晴れた朝、夏島の渚に立って骨

の釣針で魚を釣り、骨でつくった鉦で魚を突くひとりの裸の少年を。はるか遠い海の彼方から砂浜に満ちてくる潮のなかで、少年は手に鉦を持ち、その潮をかき廻しながら、「塩こをろこをろ、塩こをろこをろ……」と呪文をとなえていただろう。この呪文、正確に言えば呪詞は、『古事記』の「国生み」の章にある。

ここに天つ神諸の命以ちて、伊耶那岐の命伊耶那美の命の二柱の神に詔りたまひて、

この漂へる国を修理め固め成せと、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。かれ二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下して画きたまひ、塩こをろこをろに画き鳴して、引き上げたまひし時に、その矛の末より滴る塩の積りて成れる島は、淤能基呂島なり……。

この神話によれば、男神の伊耶那岐命と、女神の伊耶那美命が、天の浮橋という空にかかった虹のような橋の上に立って、矛で海をかきまわし、その矛を引き上げるとそのさきから滴り落ちた塩が積もり固まって日本の島々になった、というのである。そのとき、二人の神は塩こをろこをろに海をかき廻したと形容されている。この「こをろ」の意味はまだ正確にはわかっていない。だが、ただ、水を描きまわす、掻きまわすという動作の形容だけではないような気がする。

この「こをろこをろ」は、同じ『古事記』の雄略天皇の章にもまた出てくる。雄略天皇が槻の大木の下で、豊の楽、つまり酒宴を開いているとき、伊勢の国の三重の采女が酒盃をささげたところが、槻の木の葉がその酒盃のなかに落ちた。三重の采女というのは、いまの三重県のあたりに住ん

でいた豪族から宮廷に献上された采女、巫女のことである。その采女は酒盃に楓の葉が浮んでいるのに気付かず、そのまま酒を天皇に捧げた。天皇は采女の無礼を怒り、打ち伏せて首を斬ろうとしたが、その采女は「わが身をな、殺したまいそ」といつてつぎのような歌をうたった。

.....

あり衣の 三重の子が

捧がせる 瑞玉盃に

浮きし脂 落ちなづさひ

水こをろこをろに

こしも あやにかしこし

高光る 日の御子

事の 語りごとも こをば

これを聞いた天皇はその罪を許したと伝えられるが、『古事記』はこの歌は「天語歌」なりといっている。天語歌は、海人語歌であり、伊勢は海人族の勢力範囲である。そして采女はその属する部族の語部でもあった。こう考えると、水こをろこをろ、原文では、美那許袁呂許袁呂というの、海人族が使った呪詞ではあるまいかと思われる。『古事記』はむかしから各部族のあいだに語り伝えられた神話伝説を、当時渡来したばかりの漢字の表音にしたがって文字化したものだから、

「こをろこをろ」という言葉はそれ以前の、いつごろからかわからないが、原始の時代から、海人族が海とか、水とかを表現するものだったと考えられる。その言葉は、単に、海、または水を表示するということとどまらず、古代のひとびとが感じていた海、その潮鳴りと潮の香りと壮大なうねりなど、あらゆる感覚でとらえられる海の全量、海全体に匹敵するまじないの言葉だった。

「こをろ、こをろ……」とまじないの言葉、呪詞を口にしながら海のなかをかき廻していると、そこからは、大きな魚、小さな魚、蟹、蛤、赤貝などを漁ることができた。それは渚に棲む古代人にとってはおかけがえのない食料であり、その食料を漁ることこそが古代人の生活そのものであった。

私はいま、私のイメージのなかの古代人、夏島の渚で「こをろ、こをろ……」と呪詞をとこなえながら銚で魚を突いている少年の姿のなかに、烈しい生の意志を見る。嵐がおこって海が荒れれば魚は漁れない。どこかの火の山が怒って爆発し、津波がおれば海には入れない。海に入らなければ喰うものがない。その不安とおそれに敢然と立ち向って海に入り、溺れて死んだ何人もの男を少年は見ている。日の神よ、部族の神よ。海を平安ならしめたまえ。海の神よ、水の神よ。海に漁るものを多く与えたまえ。さらに多くの魚と、蟹と、貝を創造り成したまえ。こをろ、こをろ。そして彼の願望は遂に人間の棲む土地、島を生むに到るのである。「塩こをろ、こをろ……」

海人族の伝承から生まれたと考えられる国生みの神話のなかで、古代人の内部の願望を直接に表現した言葉は、この「塩こをろ、こをろ」である。この国生みの章は、東南アジアからポリネシアにかけての創造型開闢神話によく似ている。創造型開闢神話というのは、世界がまだ混沌としていたとき、神の命令によって大地が創造されたというもので、太平洋ポリネシアの海洋民族の伝承に

多く見ることが出来る。原始の日本では、大地創造のときの呪詞が「こをろ、こをろ」なのだ。この「こをろ、こをろ」が私たち日本人の、人間の内部願望を表現したはじめての言葉、すなわち、私たちがいま詩と呼んでいるもののはじまりと見てよいのではなからうか。

「こをろ、こをろ」のほんとうの意味がなんであるのか、いまとなつては正確にはわからない。ある研究書では、水の滴（しずた）を形容する「ころころ」だという。だが、私はそういう感覚的な形容ではないと思う。「こをろ、こをろ」という呪詞のなかには、海の魔力や創造力、破壊力、暴力、親和力、そのほかさまざまな神秘な力への祈りがあつたに違いない。

この呪詞に似た言葉は、古代日本語に最も近いといわれる沖繩の言葉、とりわけ歌謡のなかに多く見られる。たとえば、雨乞い（あまがひ）のときに唱（な）え謡（うた）うミセセル（御宣宣る）という神託のなかにはつぎのようなものがある。

.....

天のみやの ももふり

あめのみやの やそふり

大てだに いげよこに

あわさふむ そさのふむ

よわらため やすげため

よてこぼちへ よりみちへて

あまたねむ しらたねむ

(.....)

天の庭の 百降り

天の庭の 八十ふり

大太陽に 勝（い）き子に

あわさふむ そさのふむ △原意不詳▽

和らげるため 安らげるため

注ぎこぼして 寄り満たして

甘種子も 白種子も

八よださちへ 十枝さちへ

もたいよわちへ さかよわちへ

げにたばうれ だにたばうれ

八枝差し 十枝差し

盛いたまいて 栄えたまいて

実にたまうれ 誠にたまうれ

この原意不詳の二句こそ、あきらかに古代の呪詞を原型にしたものではなからうか。

ゑ、け、あがる三日月は

ゑ、け、かみぎや 神真弓

ゑ、け、あがる赤星や

ゑ、け、かみぎや かなまき

ゑ、け、あがるぼれぼしや

ゑ、け、神がさしくせ

ゑ、け、あがる、のちぐもは

ゑ、け、神が まなききおび

(あれ! あがる三日月は

あれ! 神の神真弓

あれ! あがる赤星は

あれ! 神の神細矢

あれ! あがる群れ星は

あれ! 神の差し櫛

あれ! あがる横雲は

あれ! 神の愛御帯)

これは沖繩の『萬葉集』と呼ばれる歌謡集『おもろそうし』のなかの一篇だが、原文で読むとき、意味不明のままに詩としか呼びようのないものを感じる。それは自然をそのまま神として感じとる素朴な感受性と、柔軟な感性とが、すべての自然現象のなかに神秘をのぞき見る態度から生まれたものだ。

何年かまえ、作曲家の間宮芳生さんと対談をしたことがあるが、そのとき、間宮さんは歌曲についてこういう話をした、歌曲に歌詞はいらない。たとえば漁師の歌をつくるときには、その掛け声だけで歌詞は必要でない、というのである。私も半分は間宮さんの意見に同感である。漁師が網を曳くときの掛け声、エイ、コーラ、エイ、コーラ、という掛け声だけで充分良い歌ができる。いや、むしろ、意味を持った歌詞はその集中力を妨げるかも知れない。

あはれ

(ああ 愉快だ

あなおもしろ

ああ おもしろい

あなたのし

ああ たのしい

あなさやけ

ああ ああ ああ

をけ

ああ たのしい)

これは天の岩戸神話にある場面で、天照大神が天の岩窟から出ると、それまで暗かった空が晴れて、岩窟の前に集った神々の顔がみな明白く見えた。そのとき、神々がよろこんで、口口に云い囃したのが、この言葉である、と『古語拾遺』にある。いちおう字句の意味を尋ねてみるとつぎのようになる。「あはれ」は、天晴。^{あはれ}「おもしろ」は面(顔) ^{おもて}が白く見えること。「たのし」は手を伸ばして舞うこと、手伸し。^{たの}「きやけ」は竹葉 ^{きさば}の声。舞うときに手に持つ笹の葉が揺れて音をたてるありさま。「をけ」は木の名で、その葉を振って音をたて神を呼ぶことを意味する。この詞句を声を